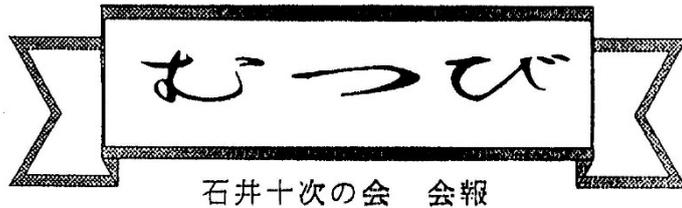


2020年
(令和2年)
12月11日



279号

石井十次を想う

前 石井十次資料館職員
宇田津 真理子

1 石井記念友愛社は教育環境として最適地

石井十次資料館の職員として、朝、方舟館に出勤すると、たくさんの木々の木漏れ陽、四季折々の花、目に眩しい緑の葉っぱ、木の葉の重なる音、鳥の声、土や草の香りに迎えられとても気持ちがいい。このように石井記念友愛社は自然を感じながら、清らかな空気を満喫することができる素晴らしい環境にある。そして、いま石井十次を想う。

石井十次が岡山孤児院を茶臼原に移し、ここでの生活を「人間をつくる」ほんものの教育の場として選んだのは、その教育が100年以上たった現代でも通じるものがあるのではないか。むしろ、今の教育において、このことが見直されなければならないのではないか。そう伝えようとしているように思える。

2 十次はルソー著「エミール」の自然教育主義体现者

石井十次が影響を受けたとされるルソーの『エミール』(仏:1762年)。ルソーが架空の孤児エミールを設定し、生まれた時から青年期にいたるまで教育するという内容の書物だ。石井十次は、岡山の医学校時代に前原定一少年を預かり、それから3000人近い子どもたちの養育に関わった。

私は教育者でもなく、福祉の知識もないが、一人の親として、石井十次がめざした茶臼原孤児院での教育方針に学ぶものがあり、ここは教育の原点ではないかと思う。私自身、最初に『エミール』という言葉聞いたのは、長男を幼稚園に預けた20年前のこと。その幼稚園の園長先生がよく口にしていた言葉だ。子どもが自由に手足を動かせるようになったり、言葉をおぼえたりするのは自然なことであり、身体の感覚も生後、次第に分化、発達し、運動能力が備わってくる。子どもが自然に育つときに、その発達段階に沿うのが教育の基本だと。生まれた時から幼児期に発達していく五感。その時期に、見たり聞いたり触ったり…その五感を使った遊びを存分にさせること、自然のものを味わうことこそ

が幼児教育だとよく話されていた。身体感覚や運動能力が発達し、それを土台にして知性を育み、社会性を学ぶ教育を大人から学び、物事の経験を通して身に付けていく人間づくりの教育が大事だと、子育てに悩む私に話してくれた。その子自身の成長にあった自然の育ちがあり、一様ではないこと、今はその環境を作って、あれやこれや大人が一喜一憂しなくてもよいと話してくれた。

石井十次が岡山から茶臼原に孤児院を移し、この大自然の中で、幼児期は遊ばせ、学童期は学業をさせ、青年期は社会性を営ませる。そして、施設で働く職員にも、『主婦の四角』や岡山孤児院12則の根底にある考え方を説き求めた。それぞれの発達段階に応じたそれぞれのたくさんの経験をさせ、自立、自律の道へと導いていく人間づくりの教育をしていたのではないかと考える。

3 十次の教えを連綿と今に受け継ぐ石井記念友愛社

石井十次資料館の施設の案内をさせていただく機会もあり、石井十次自身の生涯に触れ、岡山の医学校を目指すまでのこと、孤児院開院後も行動力にあふれ、様々な事業を展開するが、挫折や失敗をくり返し、また立ち直り、強い信念でまた前へ進むという人生。印象的なのは15条の自戒と16条の自規。たくさんの孤児たちと暮らしながら、自らも幻燈隊と一緒に遠征したり、茶臼原への移設、開墾をしたりする生活の中、人並みではなかなか出来ないようなことを日記に残している。そして、あらためて石井十次を想う。

石井十次記念館の方舟館正面入口に立つと、少し低い友愛園の田んぼから、その時期の爽やかな風が運ばれてくる。暑い夏の風も寒い冬の風も少しも苦にならなかった。十次の庭の銅像の木陰で昼寝をしたこともある。静養館の廊下でぼんやり梅の花を見ていたこともある。石井十次に思いを馳せるのである。石井十次が生きて、岡山孤児院、茶臼原孤児院、子どもたちやたくさんの支援者や職員、家族と過ごしていた頃を想像する。

十次自身の生涯と彼の家族や友人や支援者、そこで育った子どもたち、そのそれぞれの家族や友人たちのことを…。長きに渡り、色々な事情で親と一緒に住めなかった孤児たちを石井十次が救った。石井十次が茶臼原孤児院で目指す理想の教育がなされていた。

友愛社の子ども達は、少し遠回りしたかもしれないが、今、大人の愛情を受け、労作や日々の日課をこなす中で、大声で泣きながら、けんかしながら、笑いながら、成長していく。辛くても社会にでたら、一人の人間として生きていかなければならない。時代は迅速かつ正確な技術革新、世界と共存共栄しながらデジタルツールの開発、予想をはるかに超えたIT機器の活用などは必要不可欠な世の中である。

そういう現代、未来だからこそ、石井記念友愛社はこれからも石井十次の直向きな人生を通して、心豊かなほんものの教育とは何かを見つめ直す場所であり続けるだろう。

都城支部幹部会員との交流会

むつび前月(11月)号は荒木秀一氏(都城市立南小学校校長)と新森初男氏(石井十次の会都城支部副支部長)に寄稿いただいた。どちらも都城市。

むつび編集委員長として表敬のためそれぞれを訪ねることとした。

ありがたいことに新森氏から合流の懇談会形式を提案いただいた。10月9日に決定。

さらには、都城支部の幹部会員5人も参加することになり計8名。

にぎやかな懇談会になる予感が。

お土産に「十次茶」を持参した。

自己紹介や十次の会入会の動機などを情報交換した後、十次に学ぶ思いや更なる顕彰の必要性などを語り合った。

荒木秀一氏は書き上げた原稿を投函する覚悟を固めるため、わざわざ木城町の友愛園「資料館」を訪れしばし佇んだとのこと。武士の覚悟に通じる。

また、コミュニケーションを大切にする新森氏の主導で都城のまちづくりに寄与している皆様の活躍ぶりや十次つながりを存分に拝聴することができた。感謝!!



マイクを握る新森氏と
後列真ん中の荒木氏

むつび編集委員長 竹之下悟

★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】日野 りつ 岩見 智子

岩見 彩乃

【木城町】島田 浩二

【霧島市】松崎 久子

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【宮崎市】宮崎朝の読書会

【東京都】児玉 公人・千穂美

【大阪市】山縣 文治

★10/21～11/20の資料館来館者

団体・グループ 38人

個人 大人5人 小中高生1人

計44人

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により11月20日までのものとして
います。

★1月号の通信発送作業はお休みです。

友愛社の方々が発送して下さいます。

この会報は、宮崎県を中心に全国
1700余の個人・団体に毎月送付して
います。

社会福祉法人 石井記念友愛社

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1
後援会「石井十次の会」

TEL/FAX 0983-32-4612

メール

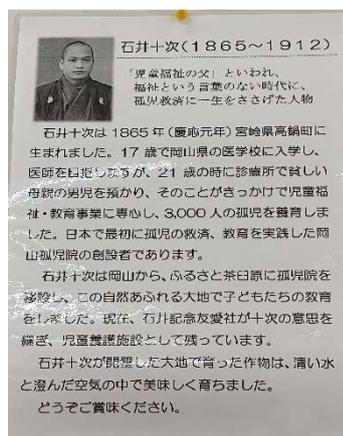
yuuaisya-juujinokai@kijo.jp

●石井十次コーナーのある店

石井十次コーナーのある店「いろどり(彩)」がこ
のほど東九州道西都インターに近い西都市岡富に
開店しました
店に入ると右
奥に石井十次
と銘打った売
り場が目につ
きます。十次



の写真と業績の説明の下には、十次農園で栽
培された新鮮な野菜が並べられています。店
の方針は「新鮮・おいしい・安い」をモットーと
し、作る人・買う人・売る人が満足できる店
作りだそうです。十次農園のほか約200の契
約農家・生産者があり、野菜や加工食品など
が販売されています。「いろどり」の名のと
おり様々な商品がありその多様さは驚くほど
です。地域社会に添い、買う人の健康と安
全・生産者の生き甲斐・店で働く人の満足を
願う経営姿勢には共感できます。皆さん、一
度寄ってみられては。



*編集後記

「むつび」巻頭の1～2頁は宇田津真理子様
から玉稿をいただきました。ありがとうございました。

早くも師走を迎えましたが、今年は新型コロナ
ウィルスのせいで例年とは違った年末となりま
す。来年は良い年でありたいものです。

*文責 石川